The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中世軍記物語における女性と仏教 : 苦悩と救済の様相をめぐって
Author(s)	Ruenpirom, Kanapat
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/33844
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（ルーンピロム・カナパット）	
論文題名	中世軍記物語における女性と仏教―苦悩と救済の様相をめぐって―

論文内容の要旨

本論文の眼目は、中世（鎌倉時代～室町時代）軍記物語における女性たちに対する仏教的な救済の様相、および女性たち自身が愛する者のために果たす役割を明らかにするところにある。そのために、女性の苦悩の様相に着目して、その克服の過程を考察する。

女性は五障三従の身で、罪深く自由がないものであるという考え方が中世の社会にあった。そのような考え方は中世軍記物語にも投影されている。多くの先行研究は、軍記物語における女性の苦悩の克服および救済の様相を論ずる際に、出家の場面や臨終正念、すなわち妄念なく往生を遂げる最終場面に着目している。しかし、出家・往生の場面以外に、女性たちは苦悩に遭遇した際に、神仏の力に帰依して、夫、子供のために様々な役割を積極的に果たして、苦悩を克服しようとしている設定がよく見られる。彼女たちは夫、子の現世救済・来世救済における役割を果たしたことによって苦悩を克服できた点から見るならば、女性の救済は出家・往生場面に限らず、愛する者のために役割を果たして苦悩を克服する過程にも見出すことができる。

以上の問題意識から、本論文では、中世軍記物語に登場する八人の女性を対象として、苦悩の様相とその克服に着目し、彼女たちに対する現世救済・来世救済の様相を明らかにすることを目的とする。本論文が対象とする女性は武将の妻や母としての役割を与えられる人物である。その八人の女性は、『平家物語』における二位殿、平重衡をめぐる女性たち、平維盛北の方、『平治物語』における常葉、『曽我物語』における曽我兄弟の母、大磯の虎、北条政子、『義経記』における静である。女性たちの苦悩の克服の様相、および仏教的な救済を考察した結果は、次のようにまとめられる。

女性の苦悩の様相について、中世軍記物語は恵まれない境遇、自らの行動への後悔の念などの女性の苦悩を多様に描いている。しかし、従来の研究が、軍記物語に登場する彼女たちの苦悩の中で最も注目してきたのは、愛別離苦である。本論文で挙げた女性は全員、戦乱、あるいは、所領争いで夫、子と生別、死別して悲嘆に暮れる点で共通している。また、夫の願望を成就させたい、夫、子を謀反や戦後処理による罪から救いたいという思い、親孝行を尽くすことと愛する者と離別することの葛藤なども、彼女たちの苦悩の原因となっており、女性の主な苦悩は親、夫、子供と関わっていることが明らかである。ここに、物語は三従の身により自由のない女性の存在を、女性登場人物の憂き身に投影していることが窺えた。

このように、物語は親、夫、子供のことを女性の苦悩の原因として設定しており、戦乱の渦に巻き込まれる女性の悲劇を表している。また、そういった親子、夫婦の恩愛を通じて、愛する者を救う・支える役割を彼女たちに与えて、苦悩の克服の様相を提示している。亡き愛する者の後世を弔う、愛する者の無事のために神仏に祈願する、つまり、女性が愛する者のための現世・来世救済を求めることは、女性全員の記述に見られ、一般的な苦悩の克服の様相と言える。また、救済へと展開する過程において、自らの家の悪行を滅亡の原因として認識すること、不孝の罪を犯さず愛別離苦に直面することなどの行動を取っている女性も見られる。もちろん、悪行、不孝の罪に対する女性の意識は、彼女たちそれぞれの特徴を示すものでありながらも、周囲の人々、神仏の同情心を生み出し、救済へと導くものとして機能していることが窺われる。よって、神仏に対する信心はもちろん、女性たち自身の恩恵を受ける性質も、苦悩を克服させる要因と見做すことができる。このような神仏に対する信心、女性自身の性質という要素をもって、愛する者のために様々な役割を果たした結果、愛する者が救われたと同時に、彼女たち自身も苦悩を克服できた。その意味で、愛する者に対する救済は彼らのみならず、女性たちにも及んでいると捉えられる。

以上のように、八人の女性それぞれが愛する者の救済のために様々な役割を与えられていることを考察した。では、彼女たち自身の臨終の時に、後世救済はどのように設定されているのか。本論文で挙げた八人の女性の中で、女人往

生の構想が設定されるのは曽我兄弟の母、大磯の虎、静の三人の女性である。兄弟の母は往生の場面において、子供の死による悲哀を翻し、往生を遂げた。一方、大磯の虎は愛執から切り離すことができないにもかかわらず、そのまま往生を遂げた。静は子の死と夫との離別によって人生を諦観しつつ、仏道に入り最終的に往生を遂げた。こうして見ると、彼女たちが往生の前に悲哀を翻すことができるか否かということには相違点があるものの、愛する者に関する苦悩が、菩提心を起こす要因として設定されていることで共通している。このように、物語は愛する者に関する苦悩、それによる妄念を、彼女たちの往生の妨げとしておらず、むしろ、仏道に入らせる動機として、恩愛による苦悩を女性の救済と結びつけていることが窺えた。

以上、八人の女性の記述を通して、親子、夫婦の恩愛を、女性の苦悩および救済の様相と関連づけようとしている中世軍記物語の姿勢を考察してきた。ここから、親子、夫婦の恩愛は女性の苦悩の原因ではあるが、恩愛の情そのものこそが苦悩の克服の核となって、愛する者と彼女たち自身の現世・来世救済をもたらすものであると示そうとしている物語の意図が窺われる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ ルーンピロム・カナパット ）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	加　藤　洋　介
	副 査	大阪大学　教授	飯　倉　洋　一
	副 査	大阪大学　講師	合　山　林太郎

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　中世軍記物語における女性と仏教－苦悩と救済の様相をめぐって－

学位申請者　ルーンピロム・カナパット

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　加藤　洋介

副査　大阪大学教授　　飯倉　洋一

副査　大阪大学講師　　合山林太郎

【論文内容の要旨】

本論文は、日本中世の軍記物語に登場する女性たちを対象として、自身の出家や往生の場面だけでなく、夫や子のために果たす役割の内実を検証し、戦乱の世における武将の妻母たちの苦悩とその克服および救済の諸相を明らかにしようとするものである。(400 字詰原稿用紙換算約 500 枚)

第一章から第三章は『平家物語』の女性たちについて、主として延慶本によって考察し、他の諸本との比較によりその特徴を浮かび上がらせようとする。第一章では平清盛の妻であった二位殿（平時子）が、夫の死および子重衡の捕縛から平家一門の没落に直面する苦悩を検討し、延慶本と覚一本のみが二位殿の遺言と平家の悪行による応報観を明示しており、さらに延慶本においては平家一門の救済が二位殿から建礼門院に託されるという、二位殿の担った役割を説く。第二章では、南都焼討の総大将であった平重衡の救済を志向する『平家物語』において、重衡に関わった三人の女性の役割を検証する。罪業に苦しむ重衡の苦悩を和らげる役割は千手前にのみ認められ、内裏女房と北の方は男女関係の妄念の解消を担い、さらに重衡の後世救済に関しては、三人の女性全員が関わる覚一本とは対照的に、延慶本は北の方のみがその役割を担い、女性たち自身の救済には触れないことで一貫しているという。第三章は、重衡と維盛を対比的に描く物語の展開において、維盛が男女の恩愛による妄念から離脱し、妻子救済を大きな動機付けとして入水を遂げることに注目し、北の方が夫によって救済される存在としての特徴を持つことを指摘する。

第四章では、平治の乱で敗死した源義朝との間に設けた三人の子供を連れて雪中を逃亡する常葉を扱う。『平治物語』諸本の中でも、学習院本が常葉母子の悲哀と観音による救済を重視していることは先行研究において指摘されているが、学習院本はそうした物語の展開において対比の表現を積極的に利用して、敗将妻子の悲劇性や常葉を助ける老婆の温情を描いていることを示す。

第五章から第七章は真名本『曽我物語』の三人の女性についての考察である。第五章では、夫を暗殺され、その父の敵討ちを果たした子供を失った曽我兄弟の母を取り上げる。「曽我の女房は大往生をぞ遂げられける」と物語は曽我兄弟母の往生を語るが、その出家願望の跡を辿ると、亡き夫への執着や現世安穏に根ざしたものから、母としての悲哀や後悔の念から発した菩提心に基づくものへと変化していることを指摘する。第六章は、曽我兄弟の兄十郎との離別以来、出家修行を経てもなお愛執の苦悩を抱えたまま往生した大磯の虎の特異なありようを、

『平家物語』の建礼門院との比較によって示す。第七章では、不孝の罪を回避させ、神仏への厚い信仰の結果として、北条政子の救済と繁栄を物語ろうとする真名本『曽我物語』の宗教的な側面を論じる。

第八章は、源義経の子を殺害された静を取り上げ、悲劇の母親像としての側面が強調され、物語後半では義経思慕の念が損なわれているとの見解に対し、義経への思慕は一貫しており、義経との再会が不可能であることに絶望し、諦観そして道心へと展開するところに、静謹の悲劇性があるとする。

【論文審査の結果の要旨】

中世軍記物語の成立や諸本、個別の解釈や人物をめぐる議論などには厖大な先行研究の蓄積がある。それらを踏まえた上で、戦乱に起因する女性たちの苦悩や悲劇、夫や子のために果たす役割を検証し、苦悩とその克服および救済の諸相を分析することにより、従来とは異なる解釈を提示することに、幾つかの点において成功している。『平家物語』を扱った検討においては諸本の違いにも目を配り、それぞれの伝本の特徴に言及しているところにも説得力がある。また『平治物語』の常葉をめぐる考察において、学習院本が対比の表現を駆使して常葉の悲劇性を描いているという指摘も、学習院本の表現方法の一端を明確にしたものとして十分評価に値する。真名本『曽我物語』を扱った一連の考察についても、亡き夫の菩提を弔い、子を養育するという物語の定型とは異なり、女性自身の往生まで描くことの意義に対する言及や、北条政子の不孝の罪を回避しようとする物語の意図に関する指摘にも見るべきものがある。

他方、論を展開してゆく過程において、主眼とする論点からやや外れた話題を取り上げることがある。北条政子の物語の根底に女人救済思想を見ることが可能なのかどうか、さらに検討が必要である。大磯の虎について問題にしているところなど、具体的な表現の分析によって、より掘り下げた読解を提示することが可能なところがある。中世軍記物語における女性を取り上げるのであれば、建礼門院に関する考察を欠かすことはできないであろう。本論文においても間接的には触れられているが、やはり全面的な検討を加えて欲しいところである。論中で使用している研究上の術語の中に、一部適切でないものが見受けられるなどの問題点もある。

以上のような問題点を含むものの、本論文には、中世軍記物語に登場する女性たちの苦悩とその克服の諸相を検証することにより、今後の研究に資する指摘を生み出すことに成功しており、一定の評価を与えることができると思われる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。